



わたしの聖戦^{ジハド} 女性が働くこと

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

134

シングルマザー事情

「シングルマザー」の言葉が社会に定着して久しい。

当初は、結婚せずに出産する女性をこう呼んだと記憶しているが、いつの間にか離婚してひとりで子育てをしている女性も含まれるようになった。

シングルマザーと聞いて真っ先に桐島洋子を思い浮かべる人は、古い世代といえるだろう。もちろん、桐島さんは今まで健在だが、モデルやカーラマンとして活躍する彼女の子どもたちのほうが若い世代には馴染み深いかもしれない。

桐島さんは、妻のあるアメリカ人男性との間にできた子どもを3人出産

した。費用が無料だからと船上で産んだ経験もお持ちだ。記者としてバリバリ仕事をしながらの出産は、当時の日本の女性たちを驚愕させた。同時に自分にはできないことだという思いが羨望やあこがれや崇拜に変わつていった。もちろん批判の声もあつただろうが、桐島さんがあまりにカッコいいので、それも吹っ飛んでしまったかにみえた。

見方は、ここ何年かの間にすいぶん緩やかになつた。その点ではシングルマザーは生きやすくなつているはずだ。が、真つ前に直面するのは経済的な事情だろう。

ある調査によれば、シングルマザーの2人にひ



いていの人はそのような勇気もなく、世間体といふ実態のないなにものかに負けてしまう。だからこそ、桐島さんの生き方は多くの女性たちの賞賛を浴び、いまだに語り継がれてきているのだろう。現実のシングルマザーの実態は極めて厳しい。

とりが月10万円以下で生活をしているという。子どもの父親からの援助がない女性がほとんどであり、昼の仕事だけでは成り立たず、夜も働くダブルワークは珍しくない。心配をかけたくないといつて身内に頼ることもせず、子どもがいじめられるからと生活保護を受けることもしない。そんななかで、餓死した母子を遺体で発見、などといつたニュースが流れるときも言い難い思ひが胸に迫る。いつたい、少子化を杞憂する日本社会にあって、こんな

ソチ五輪を目指して、フィギュアスケーターの安藤美姫さんが頑張つていた。彼女も昨春未婚のまま女兒を産んで話題になつた。もう飛べないだろうというおおかたの予想を裏切つて、堂々たる姿をみせてくれた。もちろん育児をしながら、だ。その神々しさは世の男性など足元にも及ばない母としての力強さに満ちている。

「元始、女性は太陽であつた」と平塚らいでうが表明したのは100年前のことである。その言葉通り、いつの世も女性はみずからを照らし続ける太陽でなければならぬと思つてゐる。

事態も防ぐことができないのかとやり場のない怒りさえよぎる。だが、肝心なことは現実を受け止めることだ。ていたらくな国の施策を非難するよりも目の前の生活をこなしていくほうが先決だ。そのために、

イラスト・伊藤栄章